

写真でみる大にぎわいの

収穫感謝祭

四谷の

千枚田だより



第 184 号



あんこ草餅など



しし汁



鳥長の皮肝



焼きそば



カツオのたたき



五平餅



師走の九日、稲作には最悪な年であったが、とりあえず本年の収穫を祝い、地元を始め、大勢の参加者とともに盛大に感謝祭を催した。冒頭に、会長は「この催しは参加者の皆さんの協力金で賄われており、昨年はチョッピリの黒字を得た。参加、協力いただいている地域の皆さん、若い衆も一年間のご苦労さん会として大いに楽しんでいただきたい」と挨拶。会場では「すずはら糯」六臼を黄粉・あんころ餅・大根おろし等々、一臼ごとに行列が絶え



ない。また、大はそり二杯のシシ汁も超人気。若い衆が焼く「鳥長」の皮肝や焼きそばも此処ならではの味付けで大好評。棚田っ娘の五平餅も好評で完売。開催から最後まで会場を盛り上げて頂いた【河西忍のゆかいな仲間】十一組、二十余名の生演奏、歌と踊りに会場は沸きに沸き、亡き河西さんを慕うメンバーの皆さんには感謝の至りであった。冒頭の「**継続は協力金にあり**」が功を奏したか、約一万円チョットの黒字で、来年開催の目途がついた。

田起こし&田んぼとび

十二月十九日、地元の鳳来寺小学校四、五年生が「四谷の千枚田」で田起こしに取り組んだ。児童二十三人は鍬を手に、耕した後には石垣を飛び降りる「田んぼとび」にも挑戦した。

田起こしは来年度に取り組む四年生に引き継ぐために行われ、児童たちは保存会の小山舜二から指導を受け、慣れない手で三枚の田んぼを楽しく、備中鍬で耕した。

田起こしも無事に終了、五年生の



十一人が千枚田の取り組みで学んだことを、一人ひとりから、農作業は、大変であったが、楽しかった。自然いっばいの千枚田、川遊びが楽しかった。中でも、明治三十七年に起きた「山崩れ」について、先祖が尊い命を失った事や、災害のあった場所を家族の方々の案内で直接に見て、お話を聴けたことが衝撃的であった。一年間、いろいろ、教えて戴いて有難うございました。等々、感謝の言葉を戴いた。

その後、階段状に連なっている



「日本三大石積みみの棚田」の一つ、四谷の千枚田の石垣を走って、飛び降りる「田んぼとび」にも挑戦。最大高低差一・五メートルもある田んぼを何回も、駆け下りた。

千枚田に学ぶ、児童たちの嬉々とした眼差しが嬉しく、「ワイルド」に育ってほしいと願った。

今年もサンタがやってきた

二十四日、連谷魂に燃える消防団OBは、なげなしの小遣いから子供たちにプレゼントを贈り、喜ばれた。

この催しは、二十年近く続く小さな村の地域貢献でもあり、若者たちの村の将来を語るコミュニティの善き場でもある。

平成最後の年を振り返って

〇三四年半世紀余り生きてきたが、これほど天気に虐められた年は無い。年明け早々、厳寒で、仏坂に半世紀ぶりにツララの花が咲き、田植え頃は空入梅、おかげで千枚田は湧水のため、やれやれ。夏は史上稀な高温で、この地でも何人かが日射病(舜も)を患った。暑さで稲の生育も進み、やれ、稲刈りと力んでいたら、何処にこれほど雨が降るだん…というほどの雨続き、それに輪を掛けたように二つの台風襲来、稲穂は生える(発芽)し、ほとんどの稲架は倒

壊、すつ飛び、見るも無残な状況で、末期すら憶えた。でも、棚田の百姓は、精魂かけて育てたコメに愛着、四日ほどで稲架架けの棚田を見事に蘇らせた。何だかんだと言いながらも棚田の百姓は、既に来年の田んぼの準備(冬耕)に余念がない。

何にしても、大変な年で、田植えから脱穀まで田植靴だったエン…と、苦笑で振り返っていた。

〇減反施策で四十年余、耕作放棄されていた農地を中村史樹君は、家族ぐるみで見事、田んぼに蘇らせた。

棚田や、百姓に元気をくれる若い史樹君、頑張っておくれんや

〇「お田植え感謝の夕べ」は入梅にも関わらず十四年間、雨知らず。今、各地で流行のキャンドル・ナイトのルーツでもある。「収穫感謝祭」は、兎にも角にも楽しかった。只、心配なのは、こんなド田舎で、東三河を拠点に活動するアーティストのバンド、シンガーソングライター、ベリリダンスなんかを生で見えた村の若い衆は、眼の毒になったやら、薬になったやら…

行 平成三十一年一月一日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二